

科学技術コミュニケーション推進事業「ネットワーク形成先進的科学館連携型」
平成22年度採択企画
「静岡のひと・もの・ことに生命を吹き込む科学技術文化の醸成事業」

終了報告書

平成 27 年 3 月 31 日

静岡科学館 指定管理者 公益財団法人静岡市文化振興財団

目 次

1. 概要	
1-1. 企画名称	1
1-2. 提案機関名	1
1-3. 業務主任者および担当者	1
1-4. 企画の実施期間	1
1-5. 企画概要	1
1-6. 企画の背景・経緯	1
1-7. 具体的な成果(企画提案時)	1
1-8. 目標	2
1-8-1. 長期目標	2
1-8-2. 年度目標	3
1-9. 実施体制	4
2. 企画の達成状況	5
3. 活動実績	8
4. 5年間の成果及び波及効果	17
5. 自己評価	20
6. 外部評価	25
7. 今後の展開	27

1. 概要

1-1. 企画名称

静岡のひと・もの・ことに生命を吹き込む科学技術文化の醸成事業

1-2. 提案機関名

静岡科学館る・く・る

1-3. 業務主任者および担当者

- ・業務主任者:公益財団法人静岡市文化振興財団 理事長 赤羽勝雄
- ・全体総括責任者:静岡科学館館長 長澤友香
- ・全体総括副責任:静岡科学館係長 岩品雄一郎
- ・主な企画担当者:静岡科学館科学コミュニケーター 代島慶一

1-4. 企画の実施期間(実施協定の業務実施期間を転記)

平成 22 年10月28日～平成 27 年 3 月 31 日

1-5. 企画概要

静岡にある全国水準の優良企業や研究機関・大学の持つ場や特徴・地域の特性を活かし、静岡科学館が主導して諸セクターが互いにつながることで新しいネットワークを構築する。その上で様々なレベルの科学コミュニケーション活動に従事する人材を育成し、地域におけるリーダーシップをとりつつ継続的に科学コミュニケーション活動を展開する環境を整えて、市民の科学技術に対する理解増進を図る。

本事業では、活動を①ネットワークの構築、②科学コミュニケーターの育成と科学コミュニケーション活動の展開、そして③科学技術文化の醸成の3つに大別し、上記の目的を達成していく。

1-6. 企画の背景・経緯

今日の知識基盤社会の確立に対応し、科学技術のイノベーションが求められている。その一方で、日本の児童・生徒や成人の科学への関心や理解度は下降傾向にあると指摘されており、科学技術の社会における役割に関する国民の理解の獲得、科学技術イノベーション実現のための優秀な人材の確保・育成が求められている。そしてそれらの実現に向けて、あらゆる人々が科学技術に簡単にアクセスでき、社会におけるその価値や自分との関わりを知ることができる環境、つまり「科学技術文化」を醸成することが重要となる。

教育哲学と実践ノウハウ、取り組みの場を広げることが可能にする強固な連携基盤を持つ静岡科学館は、静岡の科学文化醸成を推進していくに資すると同時に、その使命を負っている。そしてこの実現のためには、静岡科学館と地域の諸セクターをそれぞれ1対1で結んでいる既存の連携関係を、諸セクター同士の関係も促進してより広く緊密な縦横のネットワークへと発展させることが必要となっている。

1-7. 具体的な成果(企画提案時)

本事業において期待される成果は、以下の4点である。

- ① 本事業で展開する科学コミュニケーション活動は、知識や事項の伝達のみではなく、科学技術の専門家と一般市民との双方向コミュニケーションを念頭に置いて展開されるため、人々が世の中の様々な出来事・職業・個々人の立場やニーズに目を向けて社会の多様性を知り、社会の課題に対し適切な意思決定

をすることに役立つ。活動の社会的側面への導入により、これまで必要性を指摘されながら、活動の中に効果的に落としこまれてこなかった要素を本事業で重点的に扱うことが可能となり、市民が科学技術を自分の問題としてとらえ、より身近に感じることができる環境を創出する。

- ② 各セクターの特徴を生かして科学技術の最前線やその進歩、社会における役割をリアルタイムに伝えていく活動を展開することにより、高いアクセシビリティをもった良質な情報を提供することができる。また、地域を挙げた取り組みのほか、理数系教科に卓越した子どもたちを対象とした講座など、特定のニーズに特化した活動も行うことにより、社会の多様性に効果的に対応し、将来の日本の科学技術イノベーションへの国民の理解を得、人材を確保・育成することに寄与する。さらに、国際的に低いと指摘されている人々の科学技術への理解や関心の低さに歯止めをかけることが期待される。
- ③ 本支援によって、これまで築いてきたネットワークをセクター同士の縦横のネットワークへと発展させるための活動の場を創出し、静岡科学館が培ってきた科学コミュニケーションのノウハウを最大限に利活用して異分野同士が融合した活動を展開・持続させることができれば、コンテンツの実践にとどまらない各セクターの新たな価値を発掘することができる。これにより、静岡科学館の既存の来館者の枠を超えて、科学技術について学びたい大人や科学コミュニケーション活動に参画したい個人など、より多様な人を包含することができるため、さらに新しい価値の発見が可能となり、活動の幅を広げることができる。

このように、この縦横のシステムは、より効果的なシナジーの創造をもたらし、それによって科学コミュニケーション活動の可能性が自発的に広がるしきみを持ち、ひいては新しい科学技術理解増進のアプローチを提示することができる。さらに、静岡の持ち味である「ものづくり文化」との融合も視野に、経済・産業界など地域のステークホルダーにもこの取り組みを広げていくことにより、さらに新規的かつより幅広いアプローチへと拡充していくことができる。

- ④ 科学技術醸成推進室を設置して科学コミュニケーターを中心としてネットワークや科学コミュニケーション活動を維持し、県内に類似機関を展開して推進室同士の緊密で強固な連携を図ることにより、静岡にとどまらない科学技術文化の創出に寄与する。

1-8. 目標

1-8-1. 長期目標

① ネットワークの構築

- (a) ウェブサイトを開設し、科学コミュニケーション活動の運営ノウハウ・人材・場の蓄積・共有や実践報告、科学技術に関する専門家情報の共有を目的としたデータベースを構築・公開していく。
- (b) 上記ウェブサイトを効果的に使用し、ネットワークを拡張するための地域の人材や諸セクターを新たに募り、拡張していく。
- (c) 顔の見えるネットワーク構築のための方策として、科学コミュニケーション活動の実践者のための情報交換の場を創出する。

② 科学コミュニケーターの育成と科学コミュニケーション活動の展開

- (a) 各セクターの専門性や人材を効果的に活用し、社会における科学の価値・役割の理解や双方向コミュニケーションのスキルの獲得を視野に入れた科学コミュニケーターの育成を行う。
- (b) 育成した科学コミュニケーターを活用しながら、地域において人々が気軽に科学技術に触れることのできる様々な機会を拡張していく。
- (c) 地域を挙げて展開する方策として、サイエンスアゴラを参考に、まちづくりの視点も取り入れながら科学技術の専門家と一般市民をつなぐまちぐるみの複合的・総合的な大規模科学イベントを展開する。

③科学技術文化の醸成

- (a) 蓄積した知見・手法をもとに本事業をモデル化し、試行・評価を通して事業運営・展開に関する精度を上げる。
- (b) 本事業や波及する諸活動が長期にわたって積み重なり、究極的には静岡における科学技術文化の醸成を実現するための社会的基盤を構築する。
- (c) 事業モデルを他地域において普及し、他地域における「科学技術文化」の醸成を支援する。
- (d) 本事業の取り組みの周知を図ることと成果の報告を目的として、関連学協会での発表を行うと共に、市民への情報発信も行っていく。

1-8-2. 年度目標

(1)平成 22 年度年度目標

ウェブサイトを構築し、科学コミュニケーション活動のノウハウ・人材・場の共有、活動に対する意見や課題の共有を行う(①(a))。参画機関を発掘・募集する(①(b))。人々が科学技術に気軽に触れる機会の拡張を始める(②(b))。科学技術の醸成を継続的に行う基盤の構築準備を進める(③(b))。本事業の存在や成果を発信する(③(d))。科学的リテラシーの実態や科学技術に関する興味・関心、考え方、既存の科学コミュニケーション活動の実態に関するフロントエンド評価を市民や地域の諸セクターに対して行う。

(2)平成 23 年度年度目標

ウェブサイトに事業の紹介や連携機関向けの情報共有の検索機能を開設する(①(a))。異なる科学分野の交流やより幅広い活動の展開のため、科学コミュニケーション活動実践者に特化した情報交換の場を設ける(①(c))。科学コミュニケーターのすそ野を広げる(②(a))。まちづくりの視点も取り入れて科学技術の専門家と一般市民をつなぐ場を創出し、試行・評価する(②(c))。

(3)平成 24 年度年度目標

前年度の結果を受け、まちづくりの視点を取り入れた科学技術の専門家と一般市民をつなぐ場の再試行・再評価を行う(②(c))。事業のモデル化と試行・評価を行う(③(a))。科学技術の文化の醸成を継続的に行う基盤の構築を評価結果に基づいて修正し、再試行・再評価を行う(③(b))。中間報告としてそれまでの成果をまとめ、国内外への発信・意見交換を行う(③(d))。科学的リテラシーの実態や科学技術に関する興味・関心、考え方、既存の科学コミュニケーション活動の実態に関するフォーマティブ評価を市民や地域の諸セクターに対して行う。

(4)平成 25 年度年度目標

中間評価結果に基づき、事業のモデル化と試行・評価を行う(③(a))。科学技術文化の醸成を継続的に進める基盤を充実させる。静岡県内はもとより、東海地区や全国の諸セクターとの連携を強化する(③(b))。中間成果報告書をもとに、国内の学・協会や組織を活用し発信・意見交換を行うとともに、成果の普及を図る(③(c))。育成した科学コミュニケーター相互の情報交換を活発に行うための組織化等の検討を進め、育成した科学コミュニケーターを活用しながら、地域において人々が気軽に科学技術に触れることのできる様々な機会を拡張していく(②(b))。

(5)平成 26 年度年度目標

地域の拠点館の役割を成果に基づいて明確にし、地域における科学技術文化醸成のための今後の方向性を策定する(③(b))。最終報告として、これまで扱った運営手法を確立し、国内に向けて広く発信し、意見交換をしていく(③(d))。事業終了後も発展的に5年間の事業成果を継続的に展開できるよう、平成 27 年度の予算や館運営に反映させる。

1-9. 実施体制

＜業務主任者＞

(提案機関): 静岡科学館 指定管理者 公益財団法人静岡市文化振興財団
理事長 赤羽 勝雄

＜業務項目別実施区分＞

業 務 項 目	実 施 場 所	担 当 責 任 者
①ネットワークの構築		
(a)ウェブサイトの維持	静岡県静岡市駿河区南町14-25 静岡科学館	静岡科学館 科学コミュニケーター 代島慶一
(b)ネットワーク拡張のための参画機関の募集	静岡県静岡市駿河区南町14-25 静岡科学館	静岡科学館 主査 鈴木芳徳
(c)科学コミュニケーション活動実践者の情報交換の場の創出 ・サイエンスピクニック	静岡県静岡市駿河区南町14-25 静岡科学館	静岡科学館 科学コミュニケーター 代島慶一
②科学コミュニケーターの育成と科学コミュニケーション活動の展開		
(a)科学コミュニケーターの育成	静岡県静岡市駿河区南町14-25 静岡科学館	静岡科学館 科学コミュニケーター 代島慶一
(b)人々が科学技術に気軽に触れる 機会の拡張 ・科学茶房	静岡県静岡市駿河区南町 14-25 静岡科学館ほか	静岡科学館 科学コミュニケーター 代島慶一
(c)科学技術の専門家と一般市民をつなぐまちぐるみの大規模イベント の試行 ・しずおか科学技術月間	静岡県静岡市駿河区南町14-25 静岡科学館	静岡科学館 主査 鈴木芳徳

(2)平成 23 年度

① ネットワークの構築

しずおか科学技術月間の連携機関を中心に、データベースが構築されつつあり、情報共有が進んだが、有用な利用率には至らなかった。これは同意図のデータベースが行政・民間に乱立しており、各個入力が入力者の負担増につながっているためと考えられる。また、顔の見えるネットワーク構築のための方策として、科学コミュニケーション活動の実践者のための情報交換の場を創出したことにより、活動団体相互の交流が自然発生し、研修講師として招聘しあったり、互いの事業に相互に参加したりする動きができた。

② 科学コミュニケーターの育成と科学コミュニケーション活動の展開

科学コミュニケーターの育成については、それぞれ試行の形で各事業を執り行い、知見を蓄積した。科学コミュニケーター育成講座を中心に、自分なりに情報を咀嚼し相手に伝えるという訓練を継続して行うことで「伝える」「意見や情報をまとめる」ために必要不可欠な諸スキルを獲得していった。活動展開として、講演会・ワークショップ・サイエンスカフェ・実験教室・工作教室等、様々な形態の科学コミュニケーション活動を行う中で、対象の市民の年齢や発達段階、障害の有無等により、その活動形態を考慮したり、特別な配慮をしたりすることが必要なことが明らかになった。

市民と科学技術の専門家とをつなぐ科学コミュニケーション活動の展開と実践者同士の連携を深める情報交換の場の創出を目的とし「しずおか科学技術月間」を試行した。市民の反応は予想以上に良く、「科学」をキーワードにしたイベント情報が飛び交い、各イベントの活性化につながった。また、参画団体のネットワークの拡大・強化にもつながった。

③ 科学技術文化の醸成

市内の様々な分野の研究開発を行う企業等の中に、科学コミュニケーション活動による社会貢献や、市民の科学リテラシー向上への貢献を目指すコミュニティ立ち上げの動きが複数見られ、新しい動きが出てきている。本事業の取り組みの周知と成果の報告を目的として、関連学協会の市民への情報発信などを行った成果として視察や問い合わせも多く、他地域への波及効果が見込まれた。

(3)平成 24 年度

① ネットワークの構築

しずおか科学技術月間の特設サイトを静岡新聞サイト内にデータベースと連携させることで開設し、データベース利用のメリットを拡張した。このことで、23 年度の課題だった利用率は上がったが、その他の情報データベースの乱立は変わらず、入力者の負担減に向けて静岡県教育委員会のデータベースなどと調整を図った。サイエンスピクニックは、情報交換の場としての機能をより強めるよう、科学コミュニケーター育成講座や静岡県外からの招聘者との連携を試みた。その成果としてこれまでより広範な連携が生まれ、参加者相互の情報交換が活発になった。

② 科学コミュニケーターの育成と科学コミュニケーション活動の展開

前年度の結果を踏まえて、「科学コミュニケーター育成講座」「しずおか科学技術月間」を中心に内容をブラッシュアップし、再試行を進めた。科学コミュニケーター育成講座では、育成した科学コミュニケーターの活動実践とその後の活動場所確保を重視し、カリキュラム策定と各施設と調整を進めた。しずおか科学技術月間では、連携地域を拡充すると共に地域の情報をとりまとめる地域拠点館としてディスカバリーパーク焼津天文科学館との連携を進めた。再評価を進める中で、事業規模が広がるにつれて主催が静岡科学館単独では展開に非効率な点が出てくるなど課題も出てきている。

③ 科学技術文化の醸成

これまでの取り組みの結果をまとめ、国内外の関連学協会での発表を行い、モデルの発信と情報交換を進めた。また、醸成基盤づくりを目的として Facebook ページを開設して市民への情報発信機能の強化を図った。事業の再試行を進める中で確固としたモデル化及びその発信には至らず、継続的な知見・経験の積み重ねを図ることとした。

◎ フォーマティブ評価

フロントエンド評価を踏まえて市民調査を行い、科学技術と社会および科学コミュニケーションに関する市民の意識とその経年変化を探り分析することで、今後の科学コミュニケーション活動展開の指針が明らかになった。

(4)平成 25 年度

① ネットワークの構築

「しずおか科学技術月間」の特設サイトとのデータベース連携を進め、一般利用者のサイト訪問を増やすことを狙ってパンフレットからの誘導などを試み、一定の効果を上げた。一方で、参画団体施設が増えるにつれて、セキュリティ上データベースにアクセスできない施設団体も増え、データベースの利用は停滞した。「しずおか科学技術月間」成果報告会については、より情報交換の場としての機能を強めるよう改善の必要性も指摘された。「サイエンスピクニック」は初めて静岡市清流の都創造課と共催したことで、これまでの 20 ～25 団体個人の出展を大幅に上回る 39 団体個人が出展し、活動の輪が広がった。また、「科学コミュニケーター育成講座」受講生の活動が順調に増えたことで、他施設とのネットワークも広がり、静岡県全域の環境教育ネットワーク組織が生まれる等、地域波及の面でも新たな成果が見られた。

② 科学コミュニケーターの育成と科学コミュニケーション活動の展開

平成 24 年度までの結果を踏まえ「科学コミュニケーター育成講座」「しずおか科学技術月間」の内容を刷新した。研究者を招いた講演・サイエンスカフェ・ワークショップを「教科書にのっていない本当の科学」の名称で一本化し、効率よい運営とリピーター獲得を目指した。「科学コミュニケーター育成講座」では、育成した科学コミュニケーターの活動実践とその後の活動場所の確保を重視し、カリキュラム策定と各施設との調整を進めた。その結果、同年度中に 45 事業の受講生企画を実施することができ、着実に活動の幅が広がった。「しずおか科学技術月間」では、連携地域を拡大すると共に、地域情報をとりまとめる拠点館としてディスカバーパーク焼津天文科学館に加え、富士川楽座体験館どんぶらとの連携を進めた。

③ 科学技術文化の醸成

「科学コミュニケーター育成講座」を中心に成果が出始めたことで、これまでの取り組みの結果をまとめ、国内の関連学会・協会での発表や投稿を行い、事業モデルの発信と情報交換を進めた。また「科学コミュニケーター育成講座」の受講生による企画が増え、その企画への参加者が同年度だけで延べ 3,300 人を超えた。受講生自らが沼津市で科学祭を立ち上げた例など、規模の大きい活動が出てきており、科学技術文化醸成のための下地が整ってきた。

(5)平成 26 年度

① ネットワークの構築

「しずおか科学技術月間」は、パンフレットを小冊子の形式にして情報量を増やしたこと、静岡市内企業へスタンプラリーへの協力を呼びかけ景品の種類を増やしたこと等の改善策が功を奏し、参加者数・景品交換数等でこれまでで最大の成果が得られた。成果報告会については、当事業終了後の継続の可能性に

ついて意見交換をし、継続への前向きな意見を収集することができた。「科学コミュニケーター育成講座」修了生の活動が順調に増え続けていることで、他施設とのネットワークもより強固なものになりつつある。当事業の波及効果として平成 25 年度に組織された静岡県環境教育ネットワークについては、静岡県東部・中部・西部の地区ごとの組織が強化され、年明けの「ふじのくに環境学習フェスティバル」の開催に繋がっている。「サイエンスピクニック」は前年度に引き続き静岡市清流の都創造課と共催し、42 団体個人が出展した。前年を上回る出展数となり、大学・高校・中学による出展、「科学コミュニケーター育成講座」受講生による出展も増えるなど活動の輪、情報交換の場の広がりを見せている。

② 科学コミュニケーターの育成と科学コミュニケーション活動の展開

「科学コミュニケーター育成講座」については、平成 25 年度までに静岡型のカリキュラムがほぼ固まり、安定した講座運営となっている。これまでに育成した科学コミュニケーターが科学コミュニケーション活動の担い手となり、静岡県内を中心にした活発な活動を維持している。その活動内容についても、サイエンスフェスティバルのような大規模イベントから、各地域での通年制科学・天文教室の開催等多岐にわたる活動が展開されている。

③ 科学技術文化の醸成

「しずおか科学技術月間」の展開の成果として、これまで科学的な視点でイベントを実施していなかった多くの施設・団体が、科学技術関連のイベントに興味・関心を示すようになった。その結果新たな連携のもとに先端科学に関わる講演会が企画されたり、研修会に講師派遣を依頼されたりするようになった。また音楽・美術・芸術・生涯学習・舞踏など多様な領域に科学的な視点を加え事業を企画・実施する動きや、分野の異なる施設間の連携事業が生まれており、幅広い視点から科学技術を捉え、地域文化として醸成させていこうとする動きが見られるようになってきた。また、「科学コミュニケーター育成講座」受講生の活動が本年度だけで 100 回を超え、静岡科学館を核として地域での科学系事業が根付き始めている。

5 年間に培ったネットワーク形成の理念や手法について、他県・他地域からの視察・ヒアリングを受ける機会が徐々に増えており、地域の科学館の新設やリニューアルにも反映される見通しである。他県の科学館からの展示協力依頼や、新東名パーキングエリアでの展示依頼などこれまでに見られなかった動きも出始めた。今後も「地域連携」の視点から全国のネットワーク形成採択地域の情報交換等を通して、互いの事業成果を情報交換していく基盤が構築されつつある。

3. 活動実績

(1) 平成 22 年度

開催日	活動名・内容	対象	参加者数
2010 年 11 月 13 日	キッズミーティング	小学生・中学生	32 名
2010 年 11 月 19 日	第 1 回連携推進委員会	連携推進委員	6 名
2010 年 12 月 10～11 日	学校連携「ASIMO 科学館学習授業研修会	教員	210 名
2010 年 12 月 23 日	高校生が子どもたちと出会う「科学の広場 in る・く・る」	高校生・教員	1319 名
2011 年 1 月 8 日～2 月 13 日	企画展「アロサウルスの世界 ジュラ紀の地球」展	一般(不問)	100,078 名
2011 年 1 月 21 日	科学茶房「せんたん」 こわ～い？サメの夜話	一般(不問)	19 名

2011 年 1 月 23 日	科学茶房「せんたん」「バイキン」を正しく知ろう	一般(不問)	16 名
2011 年 1 月 31 日～ 2 月 14 日	科学技術と社会及び科学コミュニケーションに関する市民調査	一般(不問)	1,313 名
2011 年 2 月 19 日	とび出せ！企業・研究室「大学研究最前線」	一般(不問)	4 名
2011 年 2 月 16 日	学校連携「理科教育実験推進セミナー」	協員	34 名
2011 年 3 月 12～ 13 日	サイエンスピクニック	一般(不問)	345 名
2011 年 2 月 27 日・ 3 月 5 日	科学教室「宇宙」	一般(不問)	81 名
2011 年 3 月 6 日	先端科学者講演会	一般(不問)	60 名
2011 年 3 月 14 日	第 2 回連携推進委員会	連携推進委員	8 名
2011 年 3 月 19 日	とび出せ！企業・研究室「ものづくりに革新をもたらす光・レーザー」	一般(不問)	25 名
2011 年 3 月 24 日	とび出せ！企業・研究室「光技術で何ができるのか？」	一般(不問)	24 名

(2)平成 23 年度

開催日	活動名	対象	参加者数
2011 年 4 月 17～ 18 日	科学コミュニケーター育成講座「科学コミュニケーション研修」(第 1 回・職員研修)	職員	41 名
2011 年 5 月 27 日	高校生と子どもたちと出会う「科学の広場 in る・く・る」第 1 回協力者会議	教員	5 名
2011 年 6 月 5・13・ 19 日	科学コミュニケーター育成講座「科学コミュニケーション研修」(第 2 回・職員研修)	職員	33 名
2011 年 7 月 3 日	科学茶房「せんたん」 メディアアート:技術を生かして芸術を作り出す」	一般(不問)	5 名
2011 年 7 月 9 日	とび出せ！企業・研究室「放射線の科学」	一般(不問)	18 名
2011 年 7 月 18 日	とび出せ！企業・研究室「超伝導の謎」	一般(不問)	107 名
2011 年 7 月 23 日	高校生が子どもたちと出会う「科学の広場 in る・く・る」第 1 回実行委員会	教員	10 名
2011 年 7 月 23 日	科学コミュニケーター育成講座(第 1 回)	受講生	14 名
2011 年 7 月 30 日～ 8 月 28 日	しずおか科学技術月間	一般(不問)	34,715 名
2011 年 8 月 2 日	とび出せ！企業・研究室「深海ザメの神秘に『触れて』みよう」	一般(不問)	19 名
2011 年 8 月 23 日	とび出せ！企業・研究室「光最先端技術にせまる」	一般(不問)	20 名
2011 年 8 月 25 日	科学コミュニケーター育成講座(第 2 回)	受講生	11 名
2011 年 9 月 4 日	教員のための博物館の日 in 静岡	教員・一般・ 施設職員	861 名
2011 年 9 月 17 日	高校生と子供たちと出会う「科学の広場 in る・く・る」第 2 回実行委員会	教員	10 名

2011 年 9 月 24 日	とび出せ！企業・研究室「からだの不思議—見る、聴く、感じる」	一般(不問)	50 名
2011 年 9 月 25 日	科学コミュニケーター育成講座(第 3 回)	受講生	11 名
2011 年 9 月 25 日	キッズミーティング	小学生・中学生	18 名
2011 年 10 月 8 日	とび出せ！企業・研究室「メディアアートで遊んでみよう」	一般(不問)	49 名
2011 年 10 月 22 日	高校生と子どもたちが出会う「科学の広場 in る・く・る」第 3 回実行委員会	教員	9 名
2011 年 10 月 23 日	科学コミュニケーター育成講座(第 4 回)	受講生	13 名
2011 年 11 月 12 日	キッズミーティング	小学生・中学生	16 名
2011 年 11 月 23 日	とび出せ！企業・研究室「地震のなぜ？を科学する」	一般(不問)	42 名
2011 年 11 月 23 日	科学コミュニケーター育成講座(第 5 回)	受講生	13 名
2011 年 12 月 3 日	とび出せ！企業・研究室「環境にやさしいエネルギー・天然ガスの秘密にせまる！」	一般(不問)	11 名
2011 年 12 月 4 日	高校生と子どもたちが出会う「科学の広場 in る・く・る」第 4 回実行委員会	教員	10 名
2011 年 12 月 18 日	科学コミュニケーター育成講座(第 6 回)	一般(不問)	8 名
2011 年 12 月 23～ 24 日	高校生と子どもたちが出会う「科学の広場 in る・く・る」	一般(不問)	1,894 名
2011 年 12 月 24 日	先端科学者講演会「サイエンス・ホライズン」	一般(不問)	52 名
2012 年 1 月 7 日～ 2 月 12 日	23 年度企画展「そうだ！宇宙へいこう！る・く・る宇宙展」における講座受講生実地訓練	受講生	14 名
2012 年 1 月 7 日	そうだ！宇宙へいこう！る・く・る宇宙展」講演会 小惑星探査機「はやぶさ」の軌跡と帰還その後	一般(不問)	100 名
2012 年 1 月 8 日	「そうだ！宇宙へいこう！る・く・る宇宙展」講演会 宇宙飛行士を目指すキミたちへ	一般(不問)	90 名
2012 年 1 月 9 日	「そうだ！宇宙へいこう！る・く・る宇宙展」講演会 誰でも宇宙に!?宇宙エレベータと未来の宇宙輸送システム	一般(不問)	90 名
2012 年 1 月 15 日	「そうだ！宇宙へいこう！る・く・る宇宙展」講演会 宇宙飛行士になるには！？	一般(不問)	120 名
2012 年 1 月 21 日	「そうだ！宇宙へいこう！る・く・る宇宙展」講演会 宇宙探査ロボット最前線①	一般(不問)	80 名
2012 年 1 月 22 日	「そうだ！宇宙へいこう！る・く・る宇宙展」講演会 月への挑戦 2014	一般(不問)	90 名
2012 年 1 月 29 日	「そうだ！宇宙へいこう！る・く・る宇宙展」講演会 宇宙探査ロボット最前線②JAXA 宇宙科学研究所	一般(不問)	140 名
2012 年 2 月 4 日	「そうだ！宇宙へいこう！る・く・る宇宙展」講演会 201X 年宇宙の旅！宇宙旅行に Let's Go！	一般(不問)	110 名
2012 年 2 月 4 日	科学茶房「せんたん」 海藻バイキング	一般(不問)	22 名
2012 年 2 月 11 日	「そうだ！宇宙へいこう！る・く・る宇宙展」関連イベント 宇 宙船を着陸させよう～挑戦編～	一般(不問)	31 名
2012 年 2 月 12 日	「そうだ！宇宙へいこう！る・く・る宇宙展」講演会 宇宙を目指すキミたちへ「宇宙の質問お答えします」	一般(不問)	150 名

2012 年 2 月 18 日	科学コミュニケーター育成講座(第 7 回)	一般(不問)	7 名
2012 年 2 月 19 日	先端科学者講演会「サイエンス・ホライズン」ことばの工学 —言葉の意味をコンピュータはどう表現すべきか	一般(不問)	45 名
2012 年 3 月 10～ 11 日	サイエンスピクニック	一般(不問)	2,930 名
2012 年 3 月 17 日	科学コミュニケーター育成講座(第 8 回)	受講生	24 名
2012 年 3 月 23 日	とび出せ！企業・研究室『ものづくりを支える 産業用ロボ ットを見に行こう！』	一般(不問)	20 名

(3)平成 24 年度

開催日	活動名	対象	参加者数
2012 年 5 月 30 日	平成 25 年度静岡科学館連携推進委員会	連携推進委員	11 名
2012 年 6 月 2 日	科学コミュニケーター育成講座 SC I (第 1 回)	受講生	12 名
2012 年 6 月 2 日	科学茶房せんたん「魚たちはどんなにおいを感じている？」	一般(不問)	39 名
2012 年 6 月 10 日	科学コミュニケーター育成講座 SC I (第 2 回)	受講生	13 名
2012 年 6 月 17 日	科学コミュニケーター育成講座 SC I (第 3 回)	受講生	13 名
2012 年 6 月 24 日	科学コミュニケーター育成講座 SC I (第 4 回)	受講生	12 名
2012 年 6 月 30 日	科学コミュニケーター育成講座 SC I (第 5 回)	受講生	13 名
2012 年 6 月 30 日	とび出せ！企業・研究室「からだの不思議 見る聴く感じる」	一般(不問)	58 名
2012 年 7 月 8 日	科学コミュニケーター育成講座 SC I (第 6 回)	受講生	13 名
2012 年 7 月 14 日 ～9 月 2 日	しずおか科学技術月間	一般(不問)	93,579 名
2012 年 7 月 16 日	先端科学者講演会サイエンス・ホライズン「水族館で魚を 飼う」	一般(不問)	190 名
2012 年 7 月 21 日	科学コミュニケーター育成講座 SC I (最終回)	受講生	13 名
2012 年 7 月 29 日	とび出せ！企業・研究室「地震のなぜ？を科学する」	一般(不問)	134 名
2012 年 8 月 26 日	とび出せ！企業・研究室「ものづくりを支える産業用ロボッ ト」	一般(不問)	234 名
2012 年 8 月 26 日	第 5 回 JASC 定例会・第 1 回中部支部研究協議会	大学生・一般	29 名
2012 年 9 月 2 日	先端科学者講演会サイエンス・ホライズン「生きものはどう して生まれたか？～ゲノムの話～」	一般(不問)	80 名
2012 年 9 月 17 日	とび出せ！企業・研究室「超伝導を見てみよう！」	一般(不問)	171 名
2012 年 9 月 25 日・ 10 月 9 日	科学コミュニケーター育成講座受講後企画「これが私の DNA！」	小学生	27 名
2012 年 9 月 27 日	しずおか科学技術月間 成果報告会	施設職員	33 名

2012 年 10 月 7 日	科学コミュニケーター育成講座 SCⅡ（第 1 回）	受講生	8 名
2012 年 10 月 4 日 ～10 月 18 日	科学技術と社会及び科学コミュニケーションに関する市民調査	一般（不問）	837 名
2012 年 10 月 8 日	とび出せ！企業・研究室「酵母のひみつを解き明かせ！」	一般（不問）	105 名
2012 年 10 月 13 日	科学コミュニケーター育成講座 SCⅡ（第 2 回）	受講生	7 名
2012 年 10 月 20～ 21 日	青少年のための科学の祭典 2012 福井大会出展	一般（不問）	300 名
2012 年 10 月 26 日	あいちサイエンスフェスティバル さかえサイエンストーク 出展（しずおか科学技術月間連携）	一般（不問）	18 名
2012 年 11 月 3 日	科学コミュニケーター育成講座 SCⅡ（第 3 回）	受講生	8 名
2012 年 11 月 10 日	科学コミュニケーター育成講座 SCⅡ（第 4 回）	受講生	8 名
2012 年 11 月 10 日	サイエンスアゴラ出展	一般（不問）	60 名
2012 年 11 月 10～ 11 日	大阪自然史フェスティバル 2012 出展	一般（不問）	350 名
2012 年 11 月 18 日	科学コミュニケーター育成講座受講後企画「静岡・子ども体 験フェスティバルー 静岡県『体験の風をおこそう』運動ー」 出展	一般（不問）	50 名
2012 年 11 月 28 日	平成 25 年度第 2 回静岡科学館連携推進委員会	連携推進委員	11 名
2012 年 12 月 1 日	科学コミュニケーター育成講座受講後企画「みんなでつな ぐ元気が出るドリームサイエンス 2012 in Shimizu」出展	一般（不問）	261 名
2012 年 12 月 2 日	科学コミュニケーター育成講座 SCⅡ（第 5 回）	受講生	9 名
2012 年 12 月 9 日	科学茶房せんたん「ミツバチがつくる驚きの社会」	一般（不問）	36 名
2012 年 12 月 9 日	科学コミュニケーター育成講座関連事業「京都大学山中伸 弥教授のノーベル賞受賞と iPS 細胞の疑問質問」	一般（不問）	60 名
2012 年 12 月 16 日	科学コミュニケーター育成講座 SCⅡ（第 6 回）	受講生	9 名
2012 年 12 月 16 日	とび出せ！企業・研究室「貝が化石になるまで～深海底の 現場検証」	一般（不問）	71 名
2012 年 12 月 22 日	科学コミュニケーター育成講座受講後企画 「キッズランド」	一般（不問）	50 名
2013 年 1 月 13 日	科学コミュニケーター育成講座 SCⅡ 課題企画 「酵母から学ぶ？！体の中の化学工場」	一般（不問）	25 名
2013 年 1 月 19 日	科学コミュニケーター育成講座 SCⅡ 課題企画 「赤いバラに騙されて…人が補完する色、そして。」	一般（不問）	30 名
2013 年 1 月 19 日	科学コミュニケーター育成講座受講後企画 「キッチンサイエンス」	小学生	33 名
2013 年 2 月 9 日	科学コミュニケーター育成講座受講後企画 「光と色のふしぎ～色の立体メガネをつくろう～」	小学生	22 名
2013 年 2 月 10 日	科学コミュニケーター育成講座受講後企画 「研究最前線！ 恐竜の体ってどんな色？」	一般（不問）	151 名
2013 年 3 月 9～ 10 日	サイエンスピクニック	一般（不問）	2,752 名
2013 年 3 月 9 日	科学コミュニケーター育成講座 SCⅡ 課題企画 「さかなたちの“スーパーセンサー”」	一般（不問）	30 名

2013 年 3 月 9 日	科学コミュニケーター育成講座 SCⅡ 課題企画「えっ！お腹に味覚細胞？～知られざる消化管の監視システム～」	一般(不問)	16 名
2013 年 3 月 10 日	科学コミュニケーター育成講座 SCⅡ 課題企画「未来の宇宙輸送システム～イオンエンジン、そして夢の宇宙エレベーターへ～」	一般(不問)	31 名
2013 年 3 月 16～17 日	高校生科学の広場	高校生・一般	1,585 名
2013 年 3 月 20 日	科学コミュニケーター育成講座 SCⅡ (最終回)	受講生	7 名
2013 年 3 月 23 日	科学コミュニケーター育成講座受講後企画「おいしいドーナツのひみつと小麦粉の選び方」	小学生	28 名

(4)平成 25 年度

開催日	活動名	対象	参加者数
2013 年 4 月 29 日	教科書にのっていない本当の科学 vol.1『「環境」と「植物」のひみつを解き明かせ』	一般(不問)	60 名
2013 年 5 月 12 日	科学コミュニケーター育成講座 SCⅠ (第 1 回)	受講生	20 名
2013 年 5 月 18 日	ネットワーク構築出張『教員のための博物館の日 in 浜松』への出展と情報収集	科学館職員	30 名
2013 年 5 月 19 日	教科書にのっていない本当の科学 vol.2『果学カフェ「静岡の果物を科学する」』	一般(不問)	25 名
2013 年 5 月 19 日	科学コミュニケーター育成講座 SCⅠ (第 2 回)	受講生	17 名
2013 年 6 月 1 日	ネットワーク構築出張「日本ミュージアム・マネジメント学会第 18 回大会」参加と情報収集	職員	—
2013 年 6 月 2 日	科学コミュニケーター育成講座 SCⅠ (第 3 回)	受講生	20 名
2013 年 6 月 15 日	科学コミュニケーター育成講座受講後の実践企画「サイエンスぶちトーク「薬の飲み合わせ」」	一般(不問)	35 名
2013 年 6 月 16 日	科学コミュニケーター育成講座 SCⅠ (第 4 回)	受講生	19 名
2013 年 6 月 22 日	教科書にのっていない本当の科学 vol.3『南極観測隊隊長が伝えるリアル南極～南極から地球を見る』	一般(不問)	29 名
2013 年 6 月 26 日	ネットワーク構築出張「全国科学館連携協議会」参加と日本科学未来館担当と科学コミュニケーター育成講座打ち合わせ	職員	—
2013 年 6 月 29 日	科学コミュニケーター育成講座受講後の実践企画「魚たちの嗅覚の驚くべき能力」	一般(不問)	20 名
2013 年 6 月 30 日	科学コミュニケーター育成講座 SCⅠ (第 5 回)	受講生	18 名
2013 年 7 月 13 日	科学コミュニケーター育成講座 SCⅠ (第 6 回)	受講生	15 名
2013 年 7 月 13 日	教科書にのっていない本当の科学 vol.4「実は身近にいる！？ ウミガメのヒミツ ～海の日講演会～」	一般(不問)	172 名
2013 年 7 月 13 日～9 月 1 日	しずおか科学技術月間	一般(不問)	127,742 名
2013 年 7 月 26 日	ネットワーク構築出張「大阪大学・キッズプラザ大阪・大阪市立自然史博物館」打ち合わせ	職員	—
2013 年 7 月 28 日	科学コミュニケーター育成講座 SCⅠ (第 7 回)	受講生	18 名
2013 年 8 月 3 日	科学コミュニケーター育成講座受講後の実践企画「魚たちの嗅覚の驚くべき能力」	一般(不問)	14 名

2013 年 8 月 11 日	科学コミュニケーター育成講座受講後の実践企画「5 分でできるいちごの DNA の抽出(科学の祭典 in る・く・るに出展)」	一般(不問)	165 名
2013 年 8 月 18 日	教科書にのっていない本当の科学 vol.5「宇宙への挑戦！！宇宙科学の現場からのメッセージ」	一般(不問)	167 名
2013 年 9 月 16 日	教科書にのっていない本当の科学 vol.6「世界最大の電波望遠鏡ALMAで見る宇宙最新情報」	一般(不問)	34 名
2013 年 9 月 22 日	科学コミュニケーター育成講座受講後の実践企画「体験！科学実験 2013in 沼津」	一般(不問)	470 名
2013 年 9 月 27 日	しずおか科学技術月間成果報告会	施設職員	19 名
2013 年 9 月 28 日	科学コミュニケーター育成講座受講後の実践企画「水ロケットを飛ばそう」	小学生	31 名
2013 年 10 月 13 日	科学コミュニケーター育成講座 SCⅡ(第 1 回)	受講生	8 名
2013 年 10 月 14 日	教科書にのっていない本当の科学 vol.7「静岡における竜巻のはなし」	一般(不問)	34 名
2013 年 10 月 20 日	科学コミュニケーター育成講座 SCⅡ(第 2 回)	受講生	7 名
2013 年 10 月 27 日	科学コミュニケーター育成講座受講後の実践企画「石鹸づくり」	一般(不問)	401 名
2013 年 11 月 4 日	科学コミュニケーター育成講座 SCⅡ(第 3 回)	受講生	8 名
2013 年 11 月 9～11 日	ネットワーク構築出張「サイエンスアゴラ」出展と全国科学館連携協議会参加	職員	-
2013 年 11 月 9～10 日	科学コミュニケーター育成講座受講後の実践企画「from 静岡～みる・きく・さわる～SC アラカルト」サイエンスアゴラ出展	一般(不問)	140 名
2013 年 11 月 16 日	科学コミュニケーター育成講座受講後の実践企画「どんぐりで遊んじゃおう！」	小学生	26 名
2013 年 11 月 24 日	科学コミュニケーター育成講座 SCⅡ(第 4 回)	受講生	7 名
2013 年 11 月 24 日	教科書にのっていない本当の科学 vol.8「果学カフェ『果物を美味しくする農業技術』」	一般(不問)	29 名
2013 年 12 月 7 日	ネットワーク構築出張「日本サイエンスコミュニケーション協会年会」参加	職員	-
2013 年 12 月 7 日	科学コミュニケーター育成講座受講後の実践企画「ぐるぐるモーター」みんなでつなぐ 元気が出る ドリームサイエンス 2013 in Shimizu」出展	一般(不問)	73 名
2013 年 12 月 8 日	科学コミュニケーター育成講座 SCⅡ(第 5 回)	受講生	8 名
2013 年 12 月 21 日	教科書にのっていない本当の科学 vol.9「イルカも錯覚を起こす？ーイルカから見た世界」	一般(不問)	22 名
2013 年 12 月 24 日	科学コミュニケーター育成講座受講後の実践企画「松ぼっくりでクリスマスツリーづくり」	一般(不問)	47 名
2014 年 1 月 5 日	科学コミュニケーター育成講座 SCⅡ(第 6 回扱い)受講生課題①「地震を知って 自信をつけよう！」	一般(不問)、受講生	27 名及び受講生 8 名
2014 年 1 月 12 日	科学コミュニケーター育成講座 SCⅡ(第 6 回扱い)受講生課題②「みて・さわって・たべる！！」	一般(不問)、受講生	26 名 受講生 7 名
2014 年 1 月 19 日	教科書にのっていない本当の科学 vol.10「腸人生活～健康を育む乳酸菌～」	一般(不問)	30 名
2014 年 1 月 28 日	ネットワーク構築出張「東芝科学未来館内覧会」参加	職員	-
2014 年 2 月 1 日	科学コミュニケーター育成講座 SCⅡ(第 6 回扱い)受講生課題③「みる・きく・さわるはどうやって脳に届くの？」	一般(不問)、受講生	21 名及び受講生 6 名

2014 年 2 月 5 日	ネットワーク構築出張「ネットワーク形成先進的 science 館連携型 中間ヒアリング」参加	職員	-
2014 年 2 月 9 日	科学コミュニケーター育成講座 SCⅡ (第 6 回扱い) 受講生課題④「からだの中の外?! 考える腸!」	一般(不問)、受講生	16 名及び受講生 6 名
2014 年 2 月 10 日	ネットワーク構築出張「あいちサイエンス・コミュニケーション・ネットワーク第 3 回実行委員会」参加	職員	-
2014 年 2 月 13～14 日	ネットワーク構築出張「全国科学館連携協議会第 2 回国内研修会」参加	職員	-
2014 年 2 月 20～21 日	ネットワーク構築出張「全国科学博物館協議会総会第 21 回研究発表大会」参加	職員	-
2014 年 2 月 23 日	教科書にのっていない本当の科学 vol.11「深海の生き物のふしぎ!」	一般(不問)	33 名
2014 年 2 月 27～28 日	ネットワーク構築出張「平成 25 年度全国科学館連携協議会東海ブロック研修会」参加	職員	-
2014 年 3 月 2 日	教科書にのっていない本当の科学 vol.12 兼科学コミュニケーター育成講座受講後の実践企画「地震のなぜ?を科学する」	一般(不問)	82 名
2014 年 3 月 8～9 日	サイエンスピクニック	一般(不問)	4,824 名
2014 年 3 月 16 日	科学コミュニケーター育成講座 SCⅡ (第 7 回)	受講生	11 名
2014 年 3 月 17～18 日	ネットワーク構築出張「第 5 回小さいとこサミット」参加	職員	-
2014 年 3 月 23 日	科学コミュニケーター育成講座受講後の実践企画「ヨウ素一発! ビタミン C」「黄色の変身～ウコンのパワー～」	一般(不問)	140 名
2014 年 3 月 29 日	アーチ橋を作ろう!	一般(不問)	14 名

(5) 平成 26 年度

開催日	活動名	対象	参加者数
2013 年 4 月 29 日	科学茶房 vol.1「見えているのに、なぜ消える? ～さっかくスクリーンのなぞにせまる～」	一般(不問)	115 名
2014 年 5 月 11 日	科学コミュニケーター育成講座 SCⅠ (第 1 回)	受講生	11 名
2014 年 5 月 11 日	科学茶房 vol.2「研究最前線! 「ふれる」研究と私たちの生活～新しい医療・福祉機器をめざして～」	一般(不問)	35 名
2014 年 5 月 25 日	科学コミュニケーター育成講座 SCⅠ (第 2 回)	受講生	10 名
2014 年 6 月 1 日	科学茶房 vol.3『南極観測隊隊長が伝えるリアル南極～南極から地球を見る②』	一般(不問)	25 名
2014 年 6 月 8 日	科学コミュニケーター育成講座 SCⅠ (第 3 回)	受講生	11 名
2014 年 6 月 22 日	科学コミュニケーター育成講座 SCⅠ (第 4 回)	受講生	9 名
2014 年 6 月 29 日	科学コミュニケーター育成講座 SCⅠ (第 5 回)	受講生	8 名
2014 年 7 月 2 日	ネットワーク構築出張「全国科学館連携協議会」参加と日本科学未来館担当と科学コミュニケーター育成講座打ち合わせ	職員	-
2014 年 7 月 5～7 日	ネットワーク構築出張: さんかくテーブル@北海道大学における講師と北海道大学修士授業における講師	職員	-
2014 年 7 月 13 日	科学コミュニケーター育成講座 SCⅠ (第 6 回)	受講生	6 名

2014 年 7 月 13 日	科学茶房 vol.4『宇宙談義 ～月～』	一般(不問)	147 名
2014 年 7 月 27 日	科学コミュニケーター育成講座 SC I (第 7 回)	受講生	9 名
2014 年 8 月 10 日	科学コミュニケーター育成講座受講後の実践企画「すぐで きるイチゴの DNA の抽出！」	一般(不問)	150 名
2014 年 8 月 11 日	科学コミュニケーター育成講座受講後の実践企画「夏のサ イエンス屋台村」	一般(不問)	1,847 名
2014 年 8 月 24 日	科学茶房 vol.5『宇宙談義 ～はやぶさ 2～』	一般(不問)	210 名
2014 年 9 月 14 日	科学茶房 vol.6『竜巻・台風の渦を科学する』	一般(不問)	22 名
2014 年 9 月 21 日	科学コミュニケーター育成講座 SC II (第 1 回)	受講生	6 名
2014 年 10 月 5 日	科学コミュニケーター育成講座 SC II (第 2 回)	受講生	5 名
2014 年 10 月 19 日	科学コミュニケーター育成講座 SC II (第 3 回)	受講生	5 名
2014 年 10 月 26 日	科学茶房 vol.7「絶滅のおそれのある生き物をどう救うか」	一般(不問)	31 名
2014 年 11 月 2 日	科学コミュニケーター育成講座 SC II (第 4 回)	受講生	5 名
2014 年 11 月 8～ 9 日	ネットワーク構築出張「サイエンスアゴラ」報告と出展	職員	-
2014 年 11 月 8 日	科学コミュニケーター育成講座受講後の実践企画「サイエ ンスアゴラ出展:しずおか自然体験ミュージアム In アゴラ」	一般(不問)	100 名
2014 年 11 月 14～ 16 日	ネットワーク構築出張「大阪自然史フェスティバル」出展と ネットワーク構築	職員	-
2014 年 11 月 24 日	科学コミュニケーター育成講座 SC II (第 5 回)	受講生	6 名
2014 年 11 月 24 日	科学茶房 vol.8 果学カフェ「新しい味のみかん品種をつくる」	一般(不問)	25 名
2014 年 12 月 1～ 24 日	科学コミュニケーター育成講座受講後の実践企画「クリス マスをちいさな理科館で楽しもう」	一般(不問)	37 名
2014 年 12 月 11 日	ネットワーク構築出張「科学技術コミュニケーション推進事 業 平成 26 年度 実務担当者による意見交換会」出席	職員	-
2014 年 12 月 13～ 14 日	ネットワーク構築出張「JASC 年会」出席	職員	-
2014 年 12 月 20 日	科学茶房 vol.9「イルカと話したい！ ～イルカとコミュニケー ションを取る研究」	一般(不問)	19 名
2014 年 12 月 21 日	科学コミュニケーター育成講座受講後の実践企画「大人の 食育 第2回エコ・クッキング おしゃれな缶詰活用術」	一般(不問)	9 名
2014 年 12 月 23 日	科学コミュニケーター育成講座受講後の実践企画「宇宙最 前線 超新星 1987A を最新鋭望遠鏡で追う」	一般(不問)	200 名
2014 年 12 月 23 日	ネットワーク構築出張「科学コミュニケーター育成講座受講 後の実践企画」実施	職員	-
2014 年 12 月 24 日	科学コミュニケーター育成講座受講後の実践企画「宇宙最 前線 超新星 1987A を最新鋭望遠鏡で追う」	一般(不問)	204 名
2015 年 1 月 11 日	科学茶房 vol.10『化石博士に聞く！ 陸上でできる海底探 険～静岡の化石が語る生き物の進化～』	一般(不問)	52 名
2015 年 1 月 12 日	科学コミュニケーター育成講座 SC II (第 6 回) 受講生課題 「変わり続ける地球のヒミツ！ ～地震のしくみ等を楽しく学ぼう～」	受講生 一般(不問)	30 名

2015 年 1 月 18 日	科学コミュニケーター育成講座受講後の実践企画「しずおか自然体験ミュージアム 静岡の味くらべトーク「鯉節」& 食べもの博士に聞く！ 静岡の美味しい恵み」	一般(不問)	110 名
2015 年 1 月 18 日	科学コミュニケーター育成講座受講後の実践企画「大人の食育第 3 回食の安全情報とエコ・クッキング」	一般(不問)	10 名
2015 年 1 月 24 日	科学コミュニケーター育成講座 SCⅡ(第 6 回)受講生課題「目からウロコの脳科学～眠りと記憶を力ガクしよう～」	受講生 一般(不問)	42 名
2015 年 1 月 27 日	ネットワーク構築出張「科学技術コミュニケーション推進事業 最終報告会」出席	職員	-
2015 年 2 月 8 日	科学コミュニケーター育成講座受講後の実践企画「光と色のふしぎ探検とぐるぐるランプを作ろう」	一般(不問)	9 名
2015 年 2 月 14 日	科学コミュニケーター育成講座 SCⅡ(第 6 回)受講生課題『さかなの「る・く・る」～ヒトの 100 万倍も感度のいいハナ!?～』	受講生 一般(不問)	34 名
2015 年 2 月 22 日	科学茶房 vol.11『富士山博士に聞く！ 富士山研究最前線』	一般(不問)	87 名
2015 年 2 月 26～ 27 日	ネットワーク構築出張「全国科学博物館協議会総会及び第 22 回全国科学博物館協議会研究発表大会」出席とネットワーク構築	職員	-
2015 年 3 月 1 日	科学コミュニケーター育成講座 SCⅡ(第 7 回)	受講生	5 名
2015 年 3 月 8 日	科学茶房 vol.12「腸(ちょう)～気になる！あなたのおなかの中の知られざる話」	一般(不問)	15 名
2015 年 3 月 14～ 15 日	サイエンスピクニック	一般(不問)	5,126 名

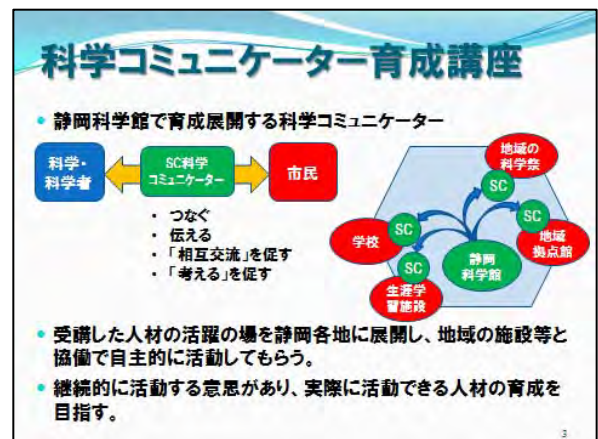
4. 5 年間の成果及び波及効果

- ① 科学コミュニケーターを「科学技術の専門家と一般市民をつなぎ、科学をわかりやすく伝える人」と捉え、様々な立場・役職・年齢の科学コミュニケーターの育成を試みた。この科学コミュニケーター育成講座において試行を含めた 4 年間で 60 名の修了生が地域において積極的に科学コミュニケーション活動を始動した。修了生による科学コミュニケーション活動は 173 企画を数え、その事業参加者数は延べ 12,000 人余に上る。

また修了生が科学コミュニケーション活動を企画し実施するために、メーリングリストを活用して情報を共有し相互に支援しあう動きも見られる。こうした中で、この夏にはこれまでの講座修了生が集い協力して大規模なサイエンスイベント「夏のサイエンス屋台村」が開催された。当日は 6 企画・2 時間 30 分の開催で 1,853 人の参加があった。

こうした成果として、地域に市民の科学リテラシー醸成の基盤を構築することができ、今後も一層精力的な活動が期待できる。実際に成果を実感するにはまだ継続的な取り組みが必要と考えるが、こうした活動を続けることで、未来社会に向けて様々な課題を常に科学的な側面から考える思考習慣や態度の育成が実現すると考えている。地域の科学館として今後科学コミュニケーション活動を維持・活性化するためにリーダーシップをとっていく覚悟である。

- ② 科学コミュニケーションを維持する人材育成の視点から分析すると、「科学技術事業の担い手育成」、「未来の科学者育成」という二点の成果を捉えることができる。



「科学技術の担い手育成」の視点からは、①で述べた科学コミュニケーターの育成のみならず、科学コミュニケーター受講生が当館のボランティア組織「サイエンス・ナビゲーター」に参画しリーダーシップをとることでボランティア活動の質・数が向上につながっているほか、地域で科学教室などを主催する受講生の数も増えており、市民科学コミュニケーターとしての新たな活動意欲が生まれている。

「高校生科学の広場」として始まった高校生科学コミュニケーター育成は、平成 25 年度より自主事業である「科学の祭典静岡大会(サイエンスフェスティバル in るくる)」にその目的が継承され、県内の高校集い科学コミュニケーション活動を市民に展開する事業として今後も地域に定着していく見通しがついた。それを機に高校生実行委員会も組織され、企画・運営の立場からも高校生が主体的に活動している。

この実行委員会が主導して大会前日には互いの科学コミュニケーションを評価しあう研修交流会も企画運営され、高校生の科学コミュニケーションスキルの向上に繋がっている。

「未来の科学者育成」という視点からは、静岡大学と連携し理数系教科に卓越した子どもたちを育成する小学校高学年・中学生のための講座「理数大好き教室」が共催事業として始まった。静岡大学理学部では、さらに興味を持った生徒を高校3年生まで受け入れた「静岡サイエンススクール」も開設されている。これらの事業は、先進的 science 館連携から派生して生まれた事業である。こうした講座に参加している生徒は、科学技術に対して非常に高い興味・関心を示し、当館でいう科学茶房・講演会とい



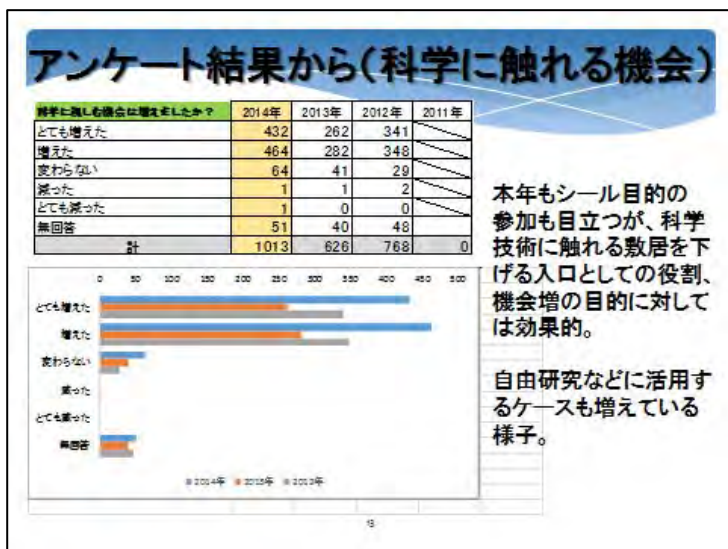
った事業への参加率も非常に高く、理数系の大学や職業選択を希望しているなど、将来の日本の科学技術イノベーションを担う人材を地域において確保・育成する基盤が整いつつある。また受講生の保護者にも、子どもを支援するために度々科学館に足を運ぶことによって科学技術への興味・関心が伸長したり、科学茶房等への参加意欲が向上したりするなどの変化が見られる。科学館として子どもの保護者層にもアプローチすることで、国際的に低いと指摘されている人々の科学技術への理解や関心の低さに歯止めをかけることが期待できるのではないかと手ごたえを感じている。

- ③ 静岡科学館では当事業による支援を受ける以前から他団体との連携を築いていたが、「これまで築いてきたネットワークをセクター同士の縦横のネットワークへと発展させるための活動の場を創出し、静岡科学館が培ってきた科学コミュニケーションのノウハウを最大限に利活用して異分野同士が融合した活動を展開・持続させることができれば、コンテンツの実践にとどまらない各セクターの新たな価値を発掘することができる。」として、支援を機に様々なネットワーク構築事業に取り組んできた。

「しずおか科学技術月間」は、小学生とその保護者層をメインターゲットとした科学フェスティバルという

顔の見えるネットワーク構築を目指して始めた「サイエンスピクニック」は初年度から最終年度まで 5 回にわたって実施し、出展数、参加者数も増えて会場規模も広がるとともに、出展者間の情報交換も活発になってネットワークも広がってきた。また、静岡市の主催事業「生物多様性シンポジウム」との共同開催とし、

達成レベル	2014年	2013年	2012年	2011年
初級	432	321	497	227
中級				62
上級	385	226	132	48
達人	189	78	108	32
無回答	7	1	31	0
計	1013	626	768	369



環境学習 テーマ別一覧

富士山	大気	エネルギー	食	環境総合
「富士山」を学ぶ? 富士山の自然・歴史・文化 富士山の自然・歴史・文化	「大気」を学ぶ? 大気汚染と健康 オゾン層 エアロゾル	「エネルギー」を学ぶ? エネルギーの活用 エネルギー資源 エネルギー政策	「食」を学ぶ? 食料の生産・消費 食料の安全・安心 食料の廃棄	「環境総合」を学ぶ? 環境問題の概要 環境政策 環境教育
「みどり」を学ぶ? 緑地の保全・利用 森林の生態系				
「水」を学ぶ? 水の循環・利用 水の質				
「廃棄物」を学ぶ? 廃棄物の処理・処分 資源の有効利用				

富士山

富士山 講演「富士山と三島」…………… P.03

富士山 きれいな湧き水をさわろう!!…………… P.04

富士山 富士山なるほど自然教室…………… P.04

富士山 水鳥ウォッチング…………… P.04

富士山 柚子だんまいのアロマグッツ作り…………… P.05

富士山 富士山沿河遊歩探検…………… P.05

富士山 御寒キャンプ…………… P.05

富士山 田舎やまのぼりクラブ(二子スノーシュー)…………… P.05

富士山 富士山のふしと動物のみつ…………… P.05

富士山 富士山の日にふじさんを作る…………… P.05

富士山 富士山南麓パードウォッチング…………… P.05

富士山 富士山の石ころバネル作り…………… P.05

富士山 講演会「富士山博士に聞く!」「富士山研究最前線」…………… P.07

みどり

みどり 天城町の雪クラパを体験してみよう…………… P.02

みどり 野鳥観察会…………… P.02

みどり 野鳥自然観察会…………… P.04

みどり 富士山なるほど自然教室…………… P.04

みどり 水鳥ウォッチング…………… P.04

みどり 柚子だんまいのアロマグッツ作り…………… P.05

みどり 富士山沿河遊歩探検…………… P.05

みどり 御寒キャンプ…………… P.05

みどり 田舎やまのぼりクラブ(二子スノーシュー)…………… P.05

みどり 富士山のふしと動物のみつ…………… P.05

みどり 富士山南麓パードウォッチング…………… P.05

みどり る・る・る自然観察会「熊木をみてみよう」…………… P.06

みどり 里山のゆかぬすみ…………… P.06

みどり 国産食物づくりに関するワークショップ…………… P.06

みどり 環境美化活動士養成講座「夏までできる環境保護」…………… P.06

水

水 リバーランドフジ(河川治水施設)・冬の生きもの観察…………… P.03

水 海の生き物、リクチャーラン…………… P.03

水 きれいな湧き水をさわろう!!…………… P.04

水 講演会「魚博士に聞く!」「こけはこけの静岡の海・川・湖の魚たち」…………… P.06

水 講演会「深海博士に聞く!」「駿河湾の奇珍で楽しい深海生物」…………… P.07

水 「ヒビデ博」のかみ講座…………… P.07

水 千支の生きもの…………… P.08

水 佐鳴湖水質調査 冬…………… P.11

大気

大気 定例観望会…………… P.02

大気 木星特別観望会…………… P.02

大気 星を観る会…………… P.03

大気 プラネタリウム投影 冬の星空…………… P.04

大気 星雲観察会…………… P.07

大気 星空観望会…………… P.09

大気 冬の星空観望会…………… P.10

エネルギー

エネルギー 温暖化防止と地域エネルギーに関するシンポジウム…………… P.06

エネルギー キッズ環境学習会「知ってる?自然が生み出すエネルギーのこと」…………… P.10

食

食 アウトドア料理を楽しむ…………… P.03

食 店舗後方施設見学会の食材の知識を高めよう!…………… P.03

食 店舗後方施設見学会の食材の知識を高めよう!…………… P.04

食 みんなの家のお昼ごはん…………… P.04

食 講演会「食べもの由来について知る!」「静岡の美味しい果物」…………… P.07

食 エコ・クッキング 冬を楽しくするレシピと家業…………… P.07

廃棄物

廃棄物 旧村地区エコリーダー講座 講師トローモ…………… P.02

廃棄物 「考えよう!わたしたちのくらら」…………… P.11

廃棄物 不用品リサイクルもったいない教室…………… P.12

廃棄物 「リメイク倶楽部」参加者作品展…………… P.12

環境総合

環境総合 エコラジ(ラジオでエコ活動を伝えよう!)…………… P.02

環境総合 「選んで学ぶ!環境ゲーム」…………… P.02

環境総合 野菜トラップとたんぽぽづくり…………… P.02

環境総合 環境かるた…………… P.02

環境総合 竹炭作り教室…………… P.03

環境総合 講演「富士山と三島」…………… P.03

環境総合 史跡・石造物巡りウォーキング…………… P.03

環境総合 第5回まちづくり活動コンテスト…………… P.04

環境総合 冬の特別展…………… P.04

環境総合 たき火の達人キャンプ…………… P.05

環境総合 富士山の日にふじさんを作る…………… P.05

環境総合 富士山の石ころバネル作り…………… P.05

環境総合 しずおか自然体験ミュージアム…………… P.06

環境総合 講演「環境博士に聞く!『地球科学』と人間」…………… P.07

環境総合 講演「富士山博士に聞く!『富士山研究最前線』」…………… P.07

環境総合 第14回しずおか川自衛大賞…………… P.08

環境総合 ふじのくにエコチャレンジCUP…………… P.08

環境総合 サイエンスビュッセル2015…………… P.08

環境総合 地球温暖化について考えよう…………… P.08

環境総合 ふじえだ環境自然館2015…………… P.09

環境総合 かねや未来館ふじのくに科学実験…………… P.09

環境総合 環境に関する資料等の展示…………… P.10

環境総合 プロジェクトWETエデュケーター養成講座…………… P.10

環境総合 プロジェクト・グリーンズ・ツリー…………… P.10

環境総合 ガーデンパークで初秋の出会しよう!…………… P.12

環境総合 カナバウミニコミートデイの開催…………… P.12

将来にわたり持続的に事業が展開できる見通しとなっている。地域における科学技術・自然環境・ものづくり・教育普及といった様々なテーマで活動する市民と産学官が一堂に会し、互いの活動成果を理解・共有することで、新たに発展的な活動展開を目指していく事業である。このように、顔の見えるネットワークにより繋がった縦横のシステムは、より効果的なシナジーの創造をもたらし、それによって科学コミュニケーション活動の可能性を自発的に広げ、新しい科学技術理解増進のアプローチを提示することができる。同事業は、今後も地域に根付いた事業として継続していく考えである。

こうした顔の見えるネットワークの波及効果の一例をあげると、企業・施設・NPO・環境学習指導員・行政が協働して環境学習を推進する「～“ふじのくに”の未来を創る～環境学習フェスティバル」がある。平成25年度より始まり、2回目となった本年度は平成27年1月1日より2月28日までの間に全県で展開される100以上の企画エントリーしている。協働・協創の理念を継承し、今後も発展的に定着させたい事業である。

- ④ この5年間、静岡科学館が「科学技術文化醸成推進室」としての役割を担い、科学コミュニケーターを中心としてネットワークや科学コミュニケーション活動を維持し、県内の諸セクター同士の緊密で強固な連携を図ることにより、静岡にとどまらない科学技術文化を創出しようとしてきた。

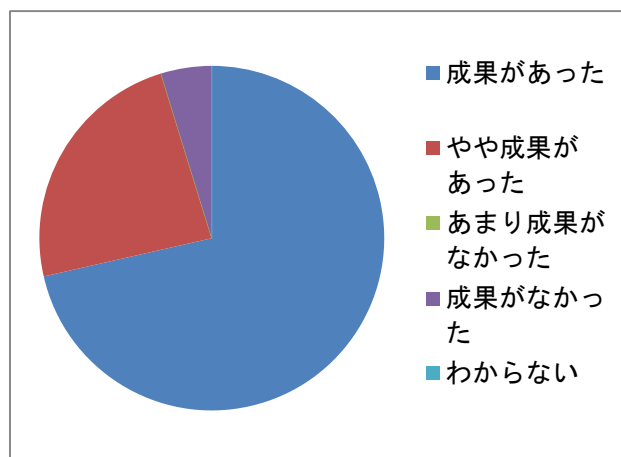
例をあげると、「教員のための博物館の日 in 静岡」の開催を通して全国の開催地区との連携を強化する、日本サイエンスコミュニケーション協会に参画し地域連携を促進する、全国科学館連携協議会や全国科学博物館協議会の研修会で成果報告をする、独立行政法人科学技術振興機構 科学コミュニケーションセンターが開発したプログラムの積極的な活用と普及を図る、などがその一例である。こうした活動により、静岡型の科学コミュニケーションの形が少しずつ見えてきた。また他地区の研修会やシンポジウムでの講師依頼やヒアリング・視察依頼等の件数は着実に増えている。「先進的科学館連携」の理念を掲げ、地方における拠点科学館としての役割を今後も担い続けるためには、構築したネットワークを良好に維持し、当館の科学館運営の柱に「科学コミュニケーション」を据え、体験型・対話型・双方向型・多世代参加型の科学教育を推進していくことが最も重要であるとする。地方科学館として今後の科学館運営の方向性を確立できたことが大きな成果である。

5. 自己評価

当事業の最終年度にあたり、当館の職員にアンケートを実施した。その結果を以下に示す。

- (1) 「しずおか科学技術月間」は目的である「ネットワーク構築」に対して成果があったか。

ア	成果があった	15
イ	やや成果があった	5
ウ	あまり成果がなかった	0
エ	成果がなかった	1
オ	わからない	0



＜そう考えた理由を具体的にご記載ください＞

●ア・イと回答

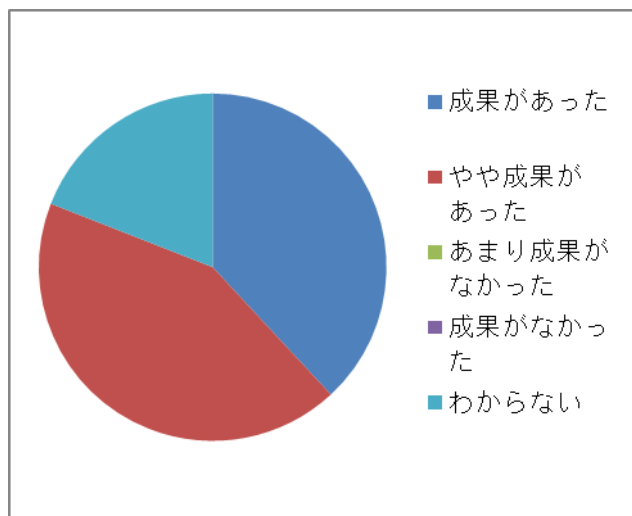
- ・県内の非常に多くの施設・団体と連絡を取り合い共同してイベントを盛り上げており、今後も連携を行っていくための下地となっていると考えるため。
- ・事業に参加した施設同士がお互いの施設の事業について知り、施設の連携が進んだと考えられる。（同他 6）
- ・団体相互が意識的に接触する契機となり、外部の団体にもその意識を持たせる契機となったため。
- ・参加施設・団体の数が増え、参加者にも当事業が定着してきていると感じたため。（同他 1）
- ・サイエンスピクニック等の事業との相乗効果で参画団体を増加させネットワークの強化につながったと考えるから。
- ・多くの企業、団体に援助いただき、お客様に喜ばれるイベントとなったため。
- ・地域企業にこういった取り組みをしていることがPRできたから。
- ・地域の拠点として科学技術と社会をつなぐことができたと考えるから。
- ・あれだけの人数の大人・子どもが夏休み中をかけて多くの科学イベントに参加・体験したことは「商品目当て」を差し引いても十分な成果であるとする。（同他 2）
- ・多くの参加者がイベント参加を通して科学に触れることができ、興味関心を深めることができたから。（同他 2）
- ・成果は感じるが中学生の参加が少ないためイにした。家族を巻き込んだ工夫も必要かと考える。

●エと回答

- ・各館相互のネットワーク構築というよりもスタンプラリーのための会場集めという印象が強いため。

（２）「科学コミュニケーター育成講座」の実施は、目的である「科学コミュニケーション活動の活性化」に成果があったか。

ア	成果があった……………	8
イ	やや成果があった…………	9
ウ	あまり成果がなかった……	0
エ	成果がなかった……………	0
オ	わからない……………	4



<そう考えた理由を具体的にご記載ください>

●ア・イと回答

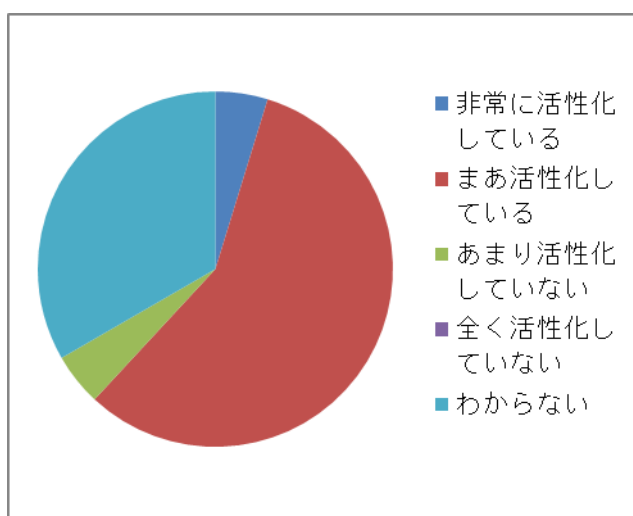
- ・科学を知り第三者に伝える、言葉磨きをして相手に伝わるコミュニケーションをする積み重ねが科学コミュニケーション活動を活性化させると考えるから。
- ・修了生の活動が活発で明らかに館だけの動きでは成しえない成果をあげているため。
- ・活動のノウハウや機会を提供したことは活性化につながったと思う。また、科学コミュニケーター相互の交流の場となっているのも大きい。
- ・生涯学習センターなどでも、修了生らが科学イベントを企画するなどして普及活動の活性化を見ている。
(同他1)
- ・科学館ボランティアスタッフとお客様との間でコミュニケーションが積極的に交わされている状況を多々見る機会があったから。
- ・受講生がサイエンス・ナビゲーターとしても活動を始め、主体的にアイデアを出してイベントを運営する等していたから。
- ・参加者の意欲を強め積極的な活動を促進することができたと感じるから。ただし、十分な広報告知がされているとはいいがたい。より静岡全体で盛り上がっていいのではないかな。
- ・科学コミュニケーター自身の活動が増えたのはもちろんだが、科学館職員の意識も変わったと感じているから。
- ・科学への興味に対する「きっかけ」を促進する意味で成果があったと考えるから。

●オと回答

- ・講座内容をあまり理解していないから。
- ・職員として科学コミュニケーター育成講座に関わっていなかったのだ。

(3) 過去5年間において、静岡市内・静岡県内の科学コミュニケーション活動は活性化していると考えらるか。

ア	非常に活性化している………	1
イ	まあ活性化している………	12
ウ	あまり活性化していない………	1
エ	全く活性化していない………	0
オ	わからない………	7



<そう考えた理由を具体的にご記載ください>

●ア・イと回答

- ・常に「く・る」にはサイエンス・ナビゲーターの方がおり、科学コミュニケーター育成講座にも新規参加者がいるため。
- ・館の周辺においては“科学コミュニケーション”を意識した活動が増えている一方で、全県的にはまだまだ発展の余地があるから。（同他4）
- ・科学的なイベントの数が増えている気がするから。
- ・全体的には活性化しているが、中学生の科学への興味・関心が少ないため、中学生をターゲットにしたコミュニケーション活動に期待したいと考える。

●ウと回答

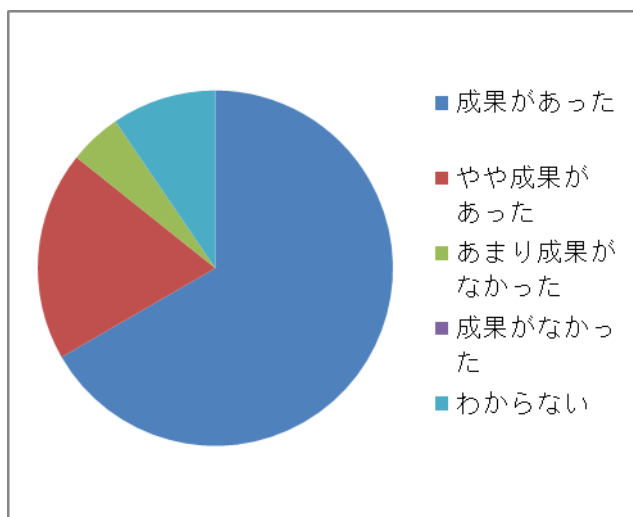
- ・科学コミュニケーション活動を積極的に行っている団体・個人はもともと活動をしており、新しい層の人々に広まっているとはあまり感じられないため。

●オと回答

- ・具体的なデータが十分でないため。
- ・科学館勤務期間が短いため。
- ・メディアで取り上げられている様子があまり感じられなかったから。

（４）「サイエンスピクニック」のようなブース型・ワークショップ型大規模イベントを実施することは、ネットワーク構築、科学技術文化の醸成に成果があると考えられるか。

ア	成果があった	14
イ	やや成果があった	4
ウ	あまり成果がなかった	1
エ	成果がなかった	0
オ	わからない	2



<そう考えた理由を具体的にご記載ください>

●ア・イと回答

- ・市民が多様な分野の出展者からの情報を受け、参加体験することで科学に触れることができる。（同他3）
- ・出展者同士、参加者同士、出展者と参加者相互でつながりやコミュニケーションが産まれる。
- ・大規模イベントとして行うことで地域活性化に大きくつながると思うから。
- ・参加者が市民に情報を伝える場所を求めているから。
- ・横のつながりやその強化は確実に活動のレベルアップにつながるから。（同他1）

- ・一人ひとりに合わせた説明や話ができるから。
 - ・日常生活の中に潜む科学を扱う実験が多く、科学の不思議に目を向ける機会となるため。
 - ・参加者相互の情報交換をする良い機会となっているから。
 - ・成果があると感じるが、参加する団体があまりに広範囲だと一体感はない気がする。今回の企画展のように静岡に限定するのも一方法か。
 - ・出展者の一方的な発信にならず、多方向の交流が生まれてくるとさらに効果的か。
 - ・活動家同士が一同に集い発表する経験を持つことで、各活動のレベルアップにつながる。
 - ・互いの出展者の顔が見えるので、情報交換がしやすくなるため。る・く・る以外での連携強化が期待できる。また、る・く・るとしてもそのネットワークのハブとしての機能を持つことは県内のネットワーク構築、科学文化の醸成の上で重要である。
 - ・成果は十分に感じるが出展者が固定された展示となっている。活性化のためには他団体等入替えが必要。
 - ・普段科学館とはあまり縁のないお客様が足を運んでくれるきっかけになっている。
 - ・発表できる場が得られることは、個々のスキルアップにもつながり活動するも立場の者の自信になると考えるから。
- ウと回答
- ・科学技術の醸成に効果があるのか疑問であるため。
- オと回答
- ・今後も継続的に良い関係を築いていければ成功であると考えますがまだ判断できない。
 - ・大規模イベント＝効果が大きいとは一概に言い切れない。（同他2）

（5）「科学技術が文化として醸成された状態」とは、どのような状態であるとイメージするか。

- ・市民の中に科学技術の視点が浸透した状態。
- ・科学館以外でも科学について話したりニュースを見たりする機会が多く、市民の関心の中に科学的なものが根付いている状態。
- ・一人ひとりの市民が情報を得たいときにすぐに得られる環境ができていること。
- ・音楽会、演劇、美術展などと同様にサイエンスイベントが行われたり、「科学が趣味」という大人がたくさんいる状態。
- ・人と科学技術がバランスよく共生できている状態。
- ・多くの市民が合理的な思考を自然に行えるよう、情報提供の仕組みやそれらの需要がバランスよく保たれていること。
- ・S C活動が日常的に様々な場所で行われている。また、市民が科学を特別視することなく話題や生活の中に科学が取り込まれている状態。
- ・関西地域のように市民団体が楽しみながら科学技術について調査や情報交換をしている状態。
- ・市民がより主体的になって活動している状態。
- ・日常生活の中で今まで気が付かなかったことが目につくようになり、それを科学的思考で考えることができるようになること。（同他3）
- ・考えること、答えを導いていくことをベースとして興味関心を深めていく力が身についている状態。（同他2）

- ・市民が身近にある技術や現象を理解し、危険を回避したりより楽しくする方法を思いつき実践ができる状態。（同他１）
- ・次世代の科学技術を担う子どもたちに向けて、活動や学習の支援を行い、それが引き継がれている。
- ・科学技術がテクノロジーとして文化や芸術の中で利用・活用されるだけでなく、科学技術そのものが一つの身近な文化・芸術となり人々の娯楽や財産となっている状態。
- ・「科学普及」や「理科離れ」が言われなくなること。
- ・市民が科学技術の分野でどのようなことが起こっていてどう進歩しているのかを、科学館等での活動を通して知ってもらうことのできる状態。
- ・多数の市民が基礎的な科学知識を身に着けており、科学技術に興味を持ち、無用の偏見を持たず、折りに触れ、科学技術についての会話が自然に生まれるような状態。
- ・世の中に日々あふれている科学トピックに多くの人が耳を傾けるとともに、それに対して自分の見解を持つことができる。可否や賛成・反対等、自分自身で決める（意見を持つ）ことができる。
- ・未知への探究心の継続

アンケート結果から、「ネットワーク構築」や「科学コミュニケーターの育成と科学コミュニケーション活動の展開」には成果を感じているものの、地域における活動の定着、「科学技術文化の醸成」には、今後の活動の継続や、課題の改善が必要であると感じている。

6. 外部評価

平成27年2月12日(木)に連携推進委員会を開催し、本事業の成果を踏まえ、今後地域で当館が果たすべき役割等について外部識者らの意見を集約した。

(1) 「しずおか科学技術月間」は目的である「ネットワーク構築」に対して成果があったか。

4名全員が「成果があった」と回答

- ・静岡市内のみならず県内の全域にわたり、多くの大学、社会教育施設、企業、団体等と連携し、子どもたちが興味をそそられるイベントを組込み、スタンプラリーという方法を採用しながら展開し、2014年には1,000人を超す参加者があった。それぞれの会場において、行き届いた準備の下、熱心な指導者によって活動が展開されていた。また、参加した機関・団体相互の連携・協力・情報交換等を促進した。
- ・多くの団体の主体的な参画を得ている。特に一般市民との係わりという視点からは、各地域の生涯学習との協力関係が構築できたことが大きな成果として考えられる。
- ・市内のみならず静岡県内の行政・企業・公益法人・学校等と広く連携を実施し、連携数・参加者数ともに十分な実績を上げている。その結果、静岡科学館を中心としたネットワークが構築されてきた。また、今後も事業を継続予定であり、今まで以上のネットワーク構築にも期待できる。
- ・これまで「静岡科学館る・く・る」が展開してきた、様々な科学教育事業では開発できなかった、新たな連携連動が見られ、具体的なネットワーク作りが展開できたことは大きな成果であるといえる。本事業主体である「静岡科学館る・く・る」を拠点としたネットワーク構築が地域の科学技術振興の大きなカギになりつつあります。科学技術の文化が醸成されるということは、とても大変なことであるといえるが、静岡は大きくこの方向に向けて、動き出したといえます。それにしても、継続するこ

とが大切であることは言うまでもありません。今後の継続した展開が望まれます。

(2) 「科学コミュニケーター育成講座」の実施は目的である「科学コミュニケーション活動の活性化」に成果があったか。

3名が「成果があった」1名が「やや成果があった」と回答

- ・年度が進む毎に講座のプログラムが充実し、静岡型カリキュラムというべきものが固まった。講座受講者間の切磋琢磨により、相互学習、相互理解、相互協力も進み、指導力も高まり、さまざまな場でその力が生かされている。今後、学芸員資格等との関連も視野に入れながら、科学（技術）コミュニケーターの社会的認知を高める方法を検討することも必要ではないか。
- ・科学コミュニケーション活動の活性化を推進する核となるプログラム、仕組みが構築された。これを活用し育てていくことが課題となる。
- ・育成した修了生が地域において積極的に科学コミュニケーション活動を実施しており、明らかに活性化している。また、修了生同士の情報共有やイベント企画への波及効果も見られる。
- ・本事業のもとに「静岡科学館る・く・る」で育った、延べ約20名の人材が、科学館る・く・るの多彩な事業に協力するだけでなく、それぞれの文脈で科学コミュニケーション活動が展開され始めたと同いました。これは良い成果であります。意見としてですが、リーダーシップのとれる人々を開拓することは、とても難儀であり、それぞれの仕事や家庭を超えてアクションを起こすことになるので、継続して取り組むことが基本的に難しいわけです。そういう意味では、予算の獲得方略や、既存の科学教育基盤とのネットワークを強化し、科学コミュニケーション活動の活性化のためのポジションづくりを各基盤が用意できるようにシステムを作り上げることも大切です。例えば、市職、県職、県立大学、国立大学、県の博物館の部や課に、科学コミュニケーション活動を位置付けることも一考であると考えます。

(3) 過去5年間において、静岡市内・静岡県内の科学コミュニケーション活動は活性化していると考えらるか。

1名が「非常に活性化している」、3名が「まあ活性化している」と回答

- ・情報化の進展により、様々な情報機器が日常生活に欠かせないものになり、マスコミを通して様々な科学技術に関する情報が伝えられてはいるが、一般的には科学技術の進展、その意義・役割・功罪について考えを深めようとする雰囲気は強いとは言えない。ただ、この事業に参加した人々の間では、さまざまな実験・体験的活動を通して、そのような関心が高まってきているに違いない。
- ・当事業により、活性化しているといえる。
- ・静岡科学館において、補助事業だけでなく、常に新しい企画を実施し、アンケートにおいても科学に触れる機会・関心が増えたことが読み取れるため。
- ・19年間、継続してきた科学の祭典を基盤にある程度、科学コミュニケーション活動は市民、県民に定着はしてきたが、本事業が始まったことにより、この5年間に様々な新しい企画、展開、発展がみられ、静岡科学館る・く・るを中心に数多くの企画実践がなされてきただけでなく、その科学コミュニケーションの機会が、他の地域への拡大していることが挙げられます。

(4) 「サイエンスピクニック」のようなブース型・ワークショップ型大規模イベントを実施することは、ネットワーク構築、科学技術の醸成に成果があると考えられるか。

3名が「成果があった」、1名が「やや成果があった」と回答

- ・自然の様々な現象や物質の変化等に法則性を見出し、新しい技術を身に付けるための学習には、試行錯誤を重ねながら、また、いろいろな人の意見・考えに耳を傾けながら取り組む参加体験型学習は欠かせない。上手く行かない時の悔しさと達成した時の喜びを味わうことが学習の重要な要素でもあるからだ。
 - ・イベントの企画や準備・実施を通じ、これまでにない関係が、関係研究者、資料保有者などの間でできている。今後更にその充実、緊密化が望まれる。
 - ・科学文化を担う人たちが顔の見えるコミュニケーションを深めることができ、またお互いに刺激することにより活動がレベルアップされているから。
 - ・「サイエンスピクニック」のようなブース型・ワークショップ型大規模イベントを実施することはもちろん価値があります。そして、より優れた成果が毎年積み上げられたことは成果であります。さらに、る・く・るが展開しているような、物語性や文脈依存の学習を背景に位置づけながら、「科学心」や「発見や発明」に児童生徒を誘う努力はとても大切です。
- その上で、付け加えるならば、多少時間がかかるにしても、体験型の課題学習を展開するブースが今後とも構築するべきで、さらなる主体的な自由研究・課題研究につながる要素を埋め込むことも大切でしょう。こちらは、「理科大好きスクール」「ふじのくに科学の学校」がこれに対応しています。

(5) 「科学技術が文化として醸成された状態」とはどのような状態であるとイメージするか。

- ・科学技術はQOL（Quality of Life）「生活の質」を高めるために活かされなければならない。そのためには、科学技術の成果として生み出された物の便利さや快適さだけに目に向けるのではなく「なぜ（Why）」「どのようにして（How）」その成果がうみだされたか、それによって私達の生活が、どのように変化し、豊かになったかを、誰もが何時も吟味して続けることが求められる。
- ・科学技術の大切さが日常生活レベルで理解され地域の暮らしの中でその確認成果の享受・向上についての活動が習慣化されている状態をいう。
- ・科学技術に触れる機会等の環境が整備されており、市民が科学技術を身近な文化にとらえ、趣味や娯楽となっている状態。
- ・科学技術が文化として醸成された状態とは、市民・県民が科学技術の有用性を理解し、発明したり発見することに興味を持ち、自らもアクション（実験や観察、ものづくり）を行ったり、それらを促進する団体の応援をしたり、起業したりすることの価値を共有できる状態のことでしょう。

7. 今後の展開

当事業の成果を平成 27 年度静岡科学館事業計画に具体的に反映し、以下のとおり自主事業・共催事業による事業継続を図る。

(1) 館の運営方針への反映

以下の4つの柱をもとに静岡科学館を運営することにより、当事業の理念・成果を継承する。

① 科学技術との協調

21 世紀を支える子どもたちの豊かな心と創造性を持った人づくりを目指して、子どもとその保護者を中心とした市民の、科学への興味・関心を伸ばす。市民が安心して生活できるよう、生活に根差した科学に関わる情報を積極的に発信する。

時代の要請と科学技術の発達を見つめながら、また、子どもたちや市民のニーズと意識の変化を見取

りながら、好奇心に目覚め、科学的な思考方法を育むオリジナリティのあるプログラムを継続的に提供する科学館を実現する。

② 不思議・驚き・楽しさの共有

「Hands-on 科学館」を基調として自然や科学の不思議をわかりやすく伝えるため、来館者が手や体を使って創意・工夫する機会(場)を科学館のあらゆる場面で提供する。そのことにより、来館者の不思議・驚き・楽しさをすべての仲間が共有し、仲間意識を育める科学館を実現する。

③ 科学館に対する来館者の共感

科学コミュニケーションを運営の基盤に、来館者のニーズを受け止め一人ひとりに対するきめ細かい対話と触れ合いにより、来館者の満足度を高めながら、科学技術の敷居を低くし、身の回りに潜む科学への興味・関心を高める。常設展示、ソフト事業、ショップ事業、受付業務等すべての業務を通して心地よい科学コミュニケーションの場面を創出する。

④ 市民との協働

市民との協働・協創を合言葉に、地域における科学教育普及の場を市民と共に創造し、市民と共に学び成長する、開かれた科学館を目指す。科学館ボランティアや科学コミュニケーターが、ボランティア活動や企画開発等運営に参画できる場を数多く用意し、子どものみならず幅広い年齢層の市民が来館したいと思う多様な事業を展開する。またこれまで培ってきた科学技術振興のネットワークを基盤に、他施設・学校・大学等との連携したイベントを地域において多様に展開していく。

(2) 当事業で実施してきた事業の継承

① ネットワーク構築

データベースの構築については、「静岡県環境教育ネットワーク」や「ふじのくにゆうゆうネット」など、行政主導のデータベースに移行し、その充実と活用推進を図っていく。

サイエンスピクニックについては、科学文化を担う市民活動家らが「顔の見えるコミュニケーションを深め、活動をレベルアップさせる場」として継続すると共に、静岡県環境学習フェスティバルのシンボルイベントとして静岡県環境教育ネットワークの情報交換の場としていく。また、静岡市生物多様性シンポジウムとの共同開催を継続し、静岡県や静岡市との環境行政や教育委員会との目的の共有を図りながら発展的に継続していく。

② 科学コミュニケーター育成と科学コミュニケーション活動の展開

科学コミュニケーター育成講座については、前後期制を廃止し、通年制の講座として、毎年10名の育成を目標に継続していく。また、構築したカリキュラムを試行する場として大学・大学院と連携していく。研究の場を持つ大学生、大学院生に科学コミュニケーションへの関心を高めることは、非常に有効であると考えためである。すでに次年度に向けて静岡大学との協議を進めており、他の大学にも協力を呼びかけたい。

教員研修については幼稚園・保育園・小学校・中学校・高等学校と年々依頼が増えている。研修内容の中に対話型ワークショップを積極的に盛り込んでいく等、教員研修を教員の科学コミュニケーションスキルを高める機会と捉え、教員が科学コミュニケーターとして機能するよう意識を高めていく。

科学コミュニケーター育成講座の修了生については、科学コミュニケーターとの自覚のもとに互いに協力して、より積極的に科学コミュニケーション活動を展開できるよう支援していく。これまで維持してきたメーリングリストを継続し情報交換の場を維持しつつも、組織化に向けた検討をしていく。また「科学(サイエ

ンス)コミュニケーター」の名称が共有して使えるよう、日本サイエンスコミュニケーション協会等と協議を続けていきたい。今年度開催したように、科学コミュニケーター育成講座生が企画する大規模イベントについても年に1回は実施し、スキルアップと情報交換の機会とする。

③ 科学技術文化の醸成

「しずおか科学技術月間」については、次年度静岡市を拠点にスタンプラリーを継続していく。夏季休業中の小学生とその保護者の科学への興味・関心を高める場としての特性は継承していく。また本年度から始めた企業協賛を拡大し、将来的に持続的な資金獲得・維持に向けた協力体制を構築したい。

静岡市における科学技術文化の醸成に向けて、科学はもちろん、音楽、美術、舞踏、生涯学習に関わる施設を管理する静岡市文化振興財団は、市民にアクションを起こしやすい立場にある。今後も財団内の連携を基盤にして、多様な分野と連携しながら事業を実施する方針である。次年度は『次世代』をテーマとした事業プロジェクト「キニナルスキニナルプロジェクト」を全施設において展開予定であり、当館においてもその中で人材育成とネットワーク構築に関わる事業を中心に科学技術文化の醸成を図っていく。

当事業で培った他県・他地域とのネットワークについては、今後も関連学協会やサイエンスアゴラなどを活用し情報交換を促進するとともに「地域連携」の在り方を模索していきたい。